

特116

701

藤戸 遊行柳 慈野 忠度 蟻通

八



始



特116
701



蟻 通 概 説

内八卷ノ一

紀貫之、紀伊國玉津島の明神に参らんとて和泉國に到りけるに、俄に日暮れ、大雨降り、乗りたる駒さへ伏して前後をわきまへずなりけるに、不審の思をなしてあれば、老いたる宮人一人、松明をかざして現れ、此所をばいつこか思へ給ふ、馬より下り給へ、馬上にあらばよも御命は候まじとあるに、貫之驚き、いつこと尋ぬれば、蟻通の明神とて物どがめ給ふ神のまゝます所なりと答へ、貫之にてまゝまさは歌を詠して神慮を慰め給へと言ふに、貫之、「雨雲の立重れる夜半なればありとは―とは思ふべきかは」と詠すれば、宮人いたく嘆賞し、和歌の徳をたたへ、祝詞をあげが、遂に眞は貫之の妙なる言葉に感し、假に姿をあらはせるなりとて鳥居の笠木に神隠れになりけり。

此曲ハ概ネ静カニ朗ラカニ謡フト虫モ心持諸所ニ有リ謡ヒ方大切ナリ
小書 故實

役別	ワキ 紀貫之	東	附	季	所
装束	風折烏帽子 着附厚板 單狩衣(長絹ニ) 白大口 紋付腰帶			四	和泉園南郡長瀬村 蟻通神社
ワキツレ 從者二人	着附熨斗目 素袍上下 小刀 扇 一人太刀持			月	
シテ 宮守	面小半尉 阿古又尉ニ 尉鬘 翁烏帽子 着附小格子 茶縷水衣 白大口 紋付腰帶 扇指シ 右ニ松明 左ニ傘持ツ 後ニ幣持			四番目 (能脇器)	級 一
				曲柄	蟻古順

蟻通

世阿弥元清作

ワキ貫之
ワキツレ二人
次亦上
ヨワク
拍子ニ合

和歌の心を道として和歌の心
を道として玉律鳴よまらん

ワキ内 関カニ

引れば紀の貫之よめていわれ和歌
の道よ交つるといふも。まだ後者
玉律鳴よまらざるの程よ。唯今
思ひ立ち紀の路の格よと志し

ホ切

道行三人上朝カサ

夢ヤ又チも寐トて。現カ又トも出トづるニ核ニ枕ニ。夜ハの閑ク戸ドの明ア暮クに
出トづるニ核ニ枕ニ。夜ハの閑ク戸ドの明ア暮クに
都トの空トの月サ影サと甲さ元そとニ思ヒ
やトるト方トも雲ハ居カ跡トは隔トたりト言ハれ
わトたるトをトよト笑トゆるトは里ト近トげトあトる
鐘トの聲ト里ト近トげトあトるト鐘トの聲ト
あトら笑ト止トや。餓トかトは日ト暮トれト大ト雨ト降トりトて。

堀通

三ミ村ムラ上ウヘ

會カ釋シヤク

然シカも案アりトたるト駒ウマさト飲ヒてト前ゼン後ゴ
とト辨ワへトずトぬトいトかトはト燈ト暗トうトて
はト投ナ行ク虞ヨ氏シがト海ウミのト雨アメのト足タビをトも
ひトかトずト強ツヨク行クかトずト虞ヨ如ニかトまトまトまトまト
便ニもトあトらトあトらト笑ト止トやト作ラ
簫セウ湘シヤウのト夜ヨのト雨アメ頻シバシバりト又ト降フつトてトをト
寺ジのト鐘ネのト聲コエもトいトひトえトずト行クとトあトく

義直

心得む。その馬上シマウマのさるまゝ可シか
 あらシテ勿モツ體タイあシの御事ミコトコトや。蟻通アリトウの
 明ミヤク非ヒとて。物咎モノトガめし給タマひ御非ミコトコトの。
 かくぞうと知りて馬ウマ上ノあシらハよモも
 御命イミナヒの心ココロへまマカル上ノサラリ
 いかさそ御社ミヤのシテ此コノ森ノ中ノ御ミ非ヒも
 空ソラの宮ミヤ人のシテ目メもシの光ヒカリの影カゲより

○小菰

拍子ウチ合アヒ

見ミれベげにも宮居ミヤイのシテ蟻通アリトウの
 非ヒの鳥居トリイの二ニ柱ハシ立タつ雲クモ透スきよ。
 下シタにシテあシたトけにあシやげにも社壇シヤダンの
 ありケけるぞ馬ウマ上ノ又マタおシり給まはらはの
 柳陰ヤナシノカゲの糸イトももて懸ぐ物かくともも
 知らハずで非ヒあシを思れざらそのハかあけれ
 思シれざらそのハかあけれ。目メその御事ミコトコトの

義直

ぬ科シテあれば。行シテか科シテ愈シテよ宵シテくきと
 萬シテの詞シテの雨シテをシテのシテ立シテち重シテありて
 暗シテまシテの夜シテあれば。あシテりシテとシテほシテしシテも
 思シテふシテべシテまシテかシテのシテはシテあシテらシテ面シテ白シテの御シテ款シテや
 凡シテそシテ款シテよシテのシテ六シテ呈シテ報シテありシテ。されシテ六シテ道シテの
 故シテよシテ定シテめシテ置シテいてシテ六シテつシテのシテ色シテとシテえシテを
 有シテありシテ。上シテあシテれシテばシテ和シテ款シテのシテ事シテ業シテのシテ并シテ代シテ

○小謡

たりシテもシテ始シテりシテ。今シテ人シテ倫シテよシテ遍シテねシテしシテ
 報シテかシテれシテをシテ傳シテ衣シテめシテさシテらシテんシテ。津シテみシテもシテ
 貫シテ之シテのシテ御シテ書シテ所シテをシテ承シテりシテてシテ。古シテ今シテ
 迄シテのシテ款シテのシテ品シテをシテ撰シテひシテてシテ。花シテびシテをシテ延シテへシテ
 君シテがシテ代シテのシテ直シテあシテるシテ道シテとシテあシテらシテのシテせシテりシテ。
 花シテよりシテ。惟シテつシテてシテ。見シテれシテばシテ。款シテのシテ心シテをシテあシテ
 ほシテあシテるシテ。以シテつシテてシテ。私シテあシテ。人シテ代シテよシテ

○獨吟

名中シテ明シテカシテ

義直

六

みんで、甚だ興る風俗。長教短教、
旋頭混本の類ひ是あり。報體一つ
よあらざれば源流漸く繁る木の
花のうち、の鶯又秋の蟬の吟の
聲行れか。和教の教あらぬ。されば
今の教、我の邪となされば。あどか
の神も、納受の心よ叶ふ。宮人も

口鳥
テ。ウト分ケテ

ミテ上
明カニ

かる亭持に逢坂の。閑の清
水よ影見ゆる。月毛の此の物と
引きて立て見れば。あまぎやあもも
の。ゆくよ歩み行く。神鳥南枝よ
巢をわけ。胡馬あ月よいをえたり。
教よ和らぐ。神心祖か。神虫の神
作がさるべき。宮人もあてま

長

二

祝詞と讀うて神意とすまゝめ
御中へ承りゆ。いでいで祝詞と
中さんと神の白木綿ひけまくも
同ト手向と木綿花のミテカミをミテカミと教へ
てミテ再拜也。謹上再拜教つて
白す神司ハ人の八女五人の神樂
男雪の神と返し。白木綿花と

持げつる神意とすまゝめなる法
神託よまかせておほも神忠と
教さん。方難やぞもろも神意と
すまゝむる事。和教よりもよろし
まのあし。其の中少も神樂と奏
し。少女の神返す返すもねもて
志ろやあ神の忌戸の古の神思ひ

忠 度 概 説

内八卷ノ二

藤原俊成に仕へし人、俊成の歿後僧となり、西國行脚の途次須磨に到りけるに、一人の樵翁に會ひ、土地の名所など聞きける程に日の暮れたるより、一夜の宿を乞ひけるに、「行きくれて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならま」といへる忠度の歌を引きて、花の蔭にまされる宿はあらまど、其歌の主なる忠度は此苔の下に在れば、供養をなす給へと言ふに、僧は称名念佛しけるに、翁は喜びていつこともなく消え失せぬ。や、ありて忠度の靈甲冑を帶いて現れ、彼の行きくれての歌は俊成の厚意にて千載集に入りたれど、平家は救勳となれる為讀人知らずと書かれしが遺憾なり、御身都に歸りなば定家卿に此由を語りて忠度と署名されたと請ひ、更に一の谷の合戦にて討死せし後、服に彼の行きくれての歌を書きたる短冊のありしにて忠度と知れたる事など語り、跡を頼みて僧の夢中に見えずなりにけり。

此曲總シテ手強ク謠ハズ品ヲ取ル心ヲ謠フベシ
小書替之形

役別	装束	附	季	所
ワキ僧	角帽子 着附無地熨斗目 水衣 緞子腰帶 扇 珠數		三	攝津國武庫郡須磨浦
ワキツレ 從僧二人	角帽子 着附無地熨斗目 水衣 緞子腰帶 扇 珠數		月	
前シテ 熊翁	面朝倉尉又笑尉ニ 尉髮 着附無地熨斗目 茶挂水衣 緞子 腰帶 尉扇指ス 右ニ杖突ク		曲柄	枕喜吉順
後シテ 平忠度	面中將今若ニ 梨子打鳥帽子 黒垂 白鉢卷 着附色入厚板 唐織 單法被 白大口 紋付腰帶 太刀佩 弓ニ短冊附ケ指 修羅扇		二番目 (修羅物)	級 三

忠度

世阿彌元清作

ワキ僧二人
同カニ
ワキ上
次才上
ヨウタ
拍子ニ合

花をも憂いと捨つる月の花を
も憂いと捨つる月の月も雲の
影ひて後かやうの姿とありて
又西國を思はずの程よ。此の度

思ひ立ち西國行脚と志し山城南
の歌宮よ都と隔つる山崎や
開戸の宿の名のみりて泊りも果てぬ
旅の習白憂まき身いらつもまどりの
塵の浮世の芥川猪名のお藤と
分けさきて月も宿かる昆陽の
池水底清く澄みあつて蘆の

紫の風の音蘆の紫の風の
音聞かどしするに憂まき事の捨つる
牙までも有馬山隠れかぬたる
世の中の憂よ心はあだ憂の急
むる枕よ鐘遠き難波の伝よ鳴
尾鳥仲波をまき小舟か仲波
をまき小舟か

尾鳥

サレ上サリ
山城南

田丸心

三ノ尉サシ上用神
拍子八六

げにせと渡る習こそかく憂き業にも
ろりすまのぬまぬ時たよ塩水と運
べ乾せどもひまのあれ夜の浦山か
けて須磨の海 蟹の呼び聲ひまか
きよの鳥鳴くも鳥音ぞをきき 元も
そもこの須磨の浦とやすみ寂しき故
に其の名をと得るわくらなよゆみあらば

須磨の浦よ藻汐たれつ 佐よ
答へよげにや魚の響お舟藻汐
の煙松の風いつれか寂しからずと
まふ事あり又此の須磨の山陰よ
一本の桜のゆざれか或人のとまき跡の
標の木あり時々時しも春の花
手向のためよ遠縁あがら足引の

山より歸るお毎よ。薪よ。花を折り
 係入て。自向をなして歸らん。自向
 をなして歸らん。いかんこれある

老人たあは。汝の山驛よてま

ますか。そんが汝の浦の。養あての

早カル上
 ヨウク
 柏子三合六

養あらば。浦よてそ。住むべきよ。おある
 方。通をん。き。お。入。こ。そ。ら。り。げ。れ

シテ内
 カツテ

そも。養人の。ぬむゆを。わがて。具の

ま。置ま。い。へ。ま。か。げ。に。げ。お。れ。の。理

あり。藻の。焚く。なる。夕煙。絶え。向

を。通。し。と。塩。木。採。る。道。を。う。か。を。れ

里。離。の。入。音。ま。れ。よ。須。磨。の。浦

近。ま。後。の。山。里。よ。柴。と。し。物。の。ゆ

へ。た。柴。と。し。物。の。ゆ。へ。た。塩。木。の。た。め

又通ひ来る。あまうりよ愚あふ。
 僧の前後にあやあ。げんや須
 磨の浦飯の可ふや妻るらん。れ
 花よ辛きの歌の嵐や山虎の音を
 ころ厭ひしよ。須磨の美木の梅
 の海がくだも隔てぬ。通ふ浦
 風は山の桜も教るものごと。あまに

よ討たれぬがかりの人の植ゑ置きたる。
 標のまうて伝あり。あはうも不思
 議の値遇の縁さ。もさばかり
 後味の和歌のあうて。侍からぬ
 宿は今宵の。主の人。名も忠度
 の聲聞きて。花の臺よ。序終へ
 かな難や。今より。はかく。巾ひの聲聞き

又通ひ来るシテ中用カニ あまり又愚あふ
 僧のイ後カあやあ甲げ上にや須
 磨のナ浦イ飯ノのニ可イあやト妻カるサらん甲形元れ
 花ニよニ幸中き上いの元歌トのニ嵐トやト山ニ虎トのニ音トを
 ころ元厭イひトる元。須磨のニあカ木トのニ梅
 のニ海ト少トくトだトもト隔トてトねトのニ通トひト浦
 月ニにト山トのニ桜トもト教トるトものトをト。夢トに

欠

欠

よ討たれぬがかりの人の植ゑ置きたる。
標シルシのまゝして作あり早カールさほろも不思
議の値遇エの縁エさしもさばかり
後味トシの和款ニテカールのあゝて倅アサケからぬ
宿早ハ今宵ヨヒの玉ニテの人ト地地名名も忠度忠
の聲シテ上聞聞きて花イの塵チよ序シ終ハへ
か難カや今今よりハハかく吊トひの聲シ聞聞き

も心して妻は聞けりや音すごき
須磨の閑屋の格寐か須磨の
閑屋の格寐かあ

後ニ忠度上
一声
拍子合ハス

恥かりや亡き跡よ姿をかへす後の
中さむる心の古よ迷ふ雨夜のお借申
さんためよ魂魄ようつりがさうりて来
りたりさあまだよ妾執多のまき妾姿

あるま行なわあかの千載集の歌の
品よは入りたれども勅勅の牙の
悲しみの後人志らすと書かれ事
妾執の中の第一ありされども
うれを撰と絵ひ後吟入を
あり後入の御牙は清内もあり人
あれむ今の定家君よ申しおるべくハ

ASIAN

たりつゝのりて西海の彼の上トハ暫シツと
 頼ニむ須磨の浦トハ源氏トハの住スみ兩平家
 のためトハのよしあしトハ知らラざるトハけさるトハ
 ちかあまトハ上トハの伸シびトハ程トハよトハの谷トハの合トハ戦トハ
 今トハかうトハよし見スえトハ一トハ程トハよトハ皆トハ々
 船トハよ取リ業トハつて海トハ上トハよ像トハむ
 われも船トハよ業トハらトハんトハとてけトハの方トハよ
シテ向 先 ラ カ ケ

うち出でて一トハよ後トハを見スれトハ武トハ花トハの國トハ
 住人トハよ密部トハの六トハ好トハ大トハ忠トハ信トハと名トハ告トハつて
 六トハ七トハ騎トハにて追スつトハかけトハたりトハこれトハそ
 らむトハところトハよし思スひトハ弱トハの手トハ鑑トハと
 引スつトハ返スせんトハ六トハ好トハ大トハやトハかトハてトハむトハすトハと
 組ツみトハ兩馬トハが同トハ一トハよしトハとトハうトハとトハ落トハちトハ彼トハの
 六トハ好トハ大トハを取トハつてトハねトハさトハ入トハ然トハよトハ刀トハよ
進 心

手をわけしよ上向六筋をが郎等御後
拍き合より立ちまわりよウハまします忠度の
 右の腕を打ち落せば左の御手にて
 六筋を取つて投げ除け今叶つ
 と思ひ言つて中スラリのきつねへ人々よ
 西拜まんと宣ひて中老明遍照す
 方世界念佛念生持た不捨と宣

和御聲の下よりも痛つやあ
 あくも六筋を太刀を抜き持ち遂よ
 御首を打ち落す六筋を心よ思
 やう痛むやはの人の御死骸を
 見なれば其の年もまだま長月
 頃の序曇り降り又降すみ定め
 かま時雨うかよむむら紅糸の錦の

直書はたゞ世の常よりもあらじ
ゆふまよりの公達キニイダケの御守ミカよこそ
あるらめと御名ミナゆかりイま可イよ
服エビラと見れば不思議ミヤカやあ短冊タビと
つけられたり見れば格宿カクヤクの題ダを
まゑサマ行ユキきマ言コトられてハホの下シタ陰カゲと宿ヤクと
せむシテ上相シテ上祀シテ上や今宵イマヨのハ主ヌシあらトまト。
上朝カニ
相シテ上
ホカニ
ホカニ

忠度カハチと書カかれたり
音ネよハひハえハ薩摩サツマの守ミにテますぞ
痛イタクマ御ミ矛コ此コのハ花ハのハ陰カゲよハ立ち
守ミりハ給タマひハとハかくハ物モノ終ハりハやハさハん
とハ目メとハ暮クらハとハめハありハ疑ウタガわハ疑ウタガ
よハもハあハらハじハ花ハのハ根ネよハ歸カエるハありハ我ワカ
跡アト吊ヒひハてハたハびハ終ハるハ成ナ陰カゲとハ格カのハ宿ヤクと
カハチ
サツマ
カケ
ウタガ
ワ
アト
ヒ
タ
ビ
ハ
シ
ル
ハ
ナ
カ
ゲ
ヤク

AS1007

1100

スバトニ 因九石
せば。花てろ。主あり。ひれ。

熊野概説

内八卷ノ三

平宗盛の寵妾熊野は、故郷より權が齋せし病める老母の文を宗盛に示して暇を乞ひしも聽されず、強いられて宗盛と車を同どうし、洛東清水の花見の宴に到り、宗盛の所望にて心ならずも起ちて舞ふ。舞半にして村雨降り出で、花を散らすにぞ、熊野の舞を止め、「いかにせん都の春も惜しけれどなれし東の花や散ららん」と一首を短冊に認め、宗盛の前に差出したるに、宗盛あはれに思ひ、暇をとらせれば、熊野は是れ清水観音の御利生なりとてうち喜び、其まゝ東に下りけり。

此曲ハ哀傷ノ心ヲ骨トスベキナレドモ殿ニヨリテハ朗ラカニ謡フコトモアルベシ
 小書 村雨留 膝行留 讀次 墨次ノ傳

シ テ 湯 谷	ツ レ 權	ワ キ ツ レ 從 者	ワ キ 平 宗 盛	役 別	裝 束 附	季 所
面深井若女ニモ ノ類) 葛扇 短冊懐中	面連面 雙 雙帶 着附摺箔 唐織着流 文懐中	着附無地腕斗目 小紋素袍 鏡ノ扇 小刀	風折烏帽子 着附厚板 地紋單狩衣 白大口 扇 腰帶			三 月
目 番 三	曲 柄 替 古 順	級 一	郎 盛 宗 平 都 京 半 前 寺 水 清 東 沼 都 京 半 後			三 月

熊野

世阿彌元清作

平宗盛曰 確カリ

此れハ平の宗盛ありごとくも幸江の國

他田の宿の長とて熊野とヤリ作

久しく勤よ留め直きて山が老母の

つたをりとして度々服を乞ひゆへとも

此の妻をかりの花見の女と思ひ

留め直きて山が又報がある

御前ミマエより 怨野ウラノなりてあらば此方ココタ

入申イリマシへ 畏オソつての

夢ユメのる惜オソシきまあれや 夢ユメのる

惜オソシきまあれや 嘆ナゲクく頃トキ花ハナとと尋マシ

ねん 江エの國クニ池田イケダの宿ヤド長老チヤウジヤウ

の序アト内ウチは仕シ入イ申マシす 朝アサ顔ガホと申マシす 女メ

てふ 怨野ウラノス 久ヒサく 怨ウラみ 入イり

ゆがけの程ほど老母オウボの御痛ミイタつりとて度々タビタビ

人ヒトと申マシ上ウせいへとも更マシは御下ミタりも

あぐの程ほどよ 此ココの度タビの朝顔アサガハが御近ミカヒにシりゆ

此ココの程ほどの松マツの夜ヨの日ヒも添ソひて 松マツの

夜ヨの日ヒも添ソひて 幾いく夕暮ユクの宿ヤドあらん

夢ユメも救サツ添ソひ 假カ枕マシの 夢ユメも

あぐ 都ミヤコは早ハヤく 暮クきよけり 都ミヤコは早ハヤ

ツト表才上ツトウラサウジ
ヨウク
拍子三合ウチトリ

道行上ミチユキウラサウジ
拍子三合ウチトリ

爰止セウジや。此コノの御父ミコトのやうも頼タノシましくあう
 見えミエてのツレササリトキトキやうも御今ミコノイマのミテ用カ此コノの上ウヘ
 初顔ハツガンをも連ツれてまマり。又マタいけの文フミをも
 御目ミメよかカけて。御眼ミヤマとトやヤさサうウすスるルまマて
 あるアルぞ。此コノ方カタへヘ来キりリのミラカハへヘ往ユクかカわワたりリの
早ツレササリ往ユクてテわワたタりリのミテ用カぞゾ。熊野クマノの御ミコトまマり
 ありアリのミテ用カからカラはハかカまマりリたタるル由ユ御ミコト申マシし

へヘ往ユクかカまマりリのミテ用カ。あアらラまマりリしシよヨげゲの
 熊野クマノの御ミコトまマりリのミテ用カ。此コノ方カタへヘ来キれ
 とトがガしシのミテ用カへヘ畏オソりリてテ往ユクかカまマりリ
 のミテ用カあアらラまマりリしシよヨげゲのミテ用カ。老母ラウボの痛イタ
 みのミつツてテのホカあアらラまマりリしシよヨげゲのミテ用カ。此コノのミテ用カ度タビのミテ用カ朝アサ
 顔オモよヨとト上ウせセてテのミテ用カ。便オシ無ナうウのミテ用カへヘともトモ
 くとク見ミえエまマりリのミテ用カへヘ行ユクとトあアらラまマりリ

熊野

三

よりの文と作や。見るまでもあり

それまで高らかに讀み作入

シテ文上
○文段獨吟

甘泉殿の春の夜の夢。心と砕く
端とあり。彌山宮の秋の夜の月
終あきまゝもあらず。未世一代教主の
如來も生死の境とへ過れぬす。さき
か二月の頃申し。如く作ららん

此の春の年。より増る。朽ちた操。今年
はかりの花と。たゞ侍ちもやせりと
心弱き。老の鶯。逢ふ事も。候よ。咽
ぶ。はかりあり。たゞあるべく。はよき
やうよ。やし。習しの御眼と。賜りて
今一度。まみえ。たか。ま。せ。お。あ。ま。だ。よ
親子の一生の中。あるよ。同。じ。世。よ。だ。よ

係ハのハ結ハちハずハのハ者ハ行ハみハもハりハづハれハ給ハみ
 下ハ。后ハをハすハ返ハすハもハ命ハのハ内ハにハ入ハるハ度ハ。
 見ハ来ハらハせハたハくハてハそハ修ハへハとハふハ。老ハ奴ハ。
 れハばハさハらハぬハおハのハありハとハいハらハいハらハよハらハよハ。
 見ハまハくハほハしハまハ君ハのハあハとハ古ハ言ハまハでハもハ。
 思ハひハ出ハのハ後ハあハらハ書ハきハ留ハむハ。○そハもハ。
 此ハのハ歌ハとハやハすハはハらハうハもハ此ハのハ歌ハとハやハすハはハらハうハ。

○小謡

在ハ原ハのハ業ハ平ハのハ其ハのハ方ハのハ強ハ又ハ際ハ。
 あハまハとハ長ハ閑ハよハ信ハみハ孫ハみハ老ハ母ハのハ詠ハめハるハ。
 歌ハありハ。さハてハてハそハ業ハ平ハもハ。さハらハぬハおハのハ。
 あハくハもハかハあハるハ世ハもハとハ新ハるハ子ハのハ為ハとハ。
 詠ハみハ。一ハ事ハてハそハ。後ハあハれハ詠ハみハ。一ハ事ハ。
 こハそハ。後ハあハれハ。今ハかハかハやハうハ。よハらハばハ。
 御ハ暇ハとハ賜ハりハ。東ハよハ下ハりハのハべハらハ。老ハ母ハのハ。

痛をうりつゝさる事あはれどもさうあから。

この妻ばかりのたんのあらかでか

見捨て給ふま シテ上カチササリ 御言葉とあせ

忘れあれども花の妻あらばあうよ

限るべからず。これのあだある玉の緒の

あがきふとありやせん。たゞ御眼を

賜りつゝ トヤク さらさらさうまひ弱ま。

牙は任せてはがあま。あまもひを

慰めの花見の車同車までどもに カニ上リニテ

心とあぐさまん 上赤白カチササリ 牛飼車寄せよ ツヨク

とて牛飼車寄せよとてたれも思ひ

家のうらちぢや御出でと秘むれど

心は先よ行きかぬる是弱車の力 困メ

あまのたえありけり 元一ヤ

○獨吟

負ふ妻のげしきかあるは負ふ妻の
 げしきかあるは原おもてをさき
 行けはきく心の猿もなく車大路
 やち皮の地の堂よと伏しおむ
 観音も同座あり。軍提救世の方
 便あらたまたらちねと身り給へや
 げにや舟のまきくよ。頼む命の白

玉の愛宕の寺も打ち過まぬ
 六道のたごかや。げに怒ろしや
 此の道の冥途よ通みあるもの
 心ほそ鳥部山。煙のまも薄霞む
 聲も旅鷹の横たをる。北斗の
 星の曇あま。周法の花も開くなる
 經書堂のこれかよ。眞のたらちね

と尋ぬある子安の塔と過ぎ行けば
ミテ上朝 雲の隙行く駒の道 地 ちや狂もあく
これぞこの ミテ 車宿 地 馬留 ミテ ちより
花車。おりかの衣播磨ワカ 傳ツル 飾ツル 磨ツル の
ハ ち路チ 清水シ の チ 佛ツル の御前ミ 念誦ニ
して母の祈誓と申さん。 ワカ 妙ツル 又
報がある ワカ 御前ミ へ ワカ 慈野ツル のらづく

よあるぞ ワカ 未だ清堂ツル よは座ツル へ ワカ 行ツル きて
遅ツル あつたるぞ ワカ 急ツル いてて ワカ あたへと
ち ワカ へ ワカ 長ツル つて ワカ い ワカ かと ワカ 朝ツル 顔ツル までし
ゆ。はや花の本の酒宴の始りてゆ。
急ツル いて御ミ 事ツル ありあれとの御ミ 事ツル までゆ。
其の由ツル 伝ツル せられゆへ ワカ 心得ツル せしゆ。 ワカ 妙ツル 又
ち ワカ へ ワカ ば ワカ 花の本の酒宴の始り

ミテ

てさ。おらして御事あれとの御事
ほして何とばかり酒宴の始たる
中すが誰か作らるまらうす
みての。あうなる管をさう御事
の。あら面白の。花や。今と盛と
見ええての。何とて御事
とも遊ばされの。ぬぞ。げ。お。思。ひ

○サ。曲。獨。吟
○切。進。難。子

う。ち。よ。あ。れ。の。色。を。外。に。顯。る。よ。う。や
よ。あ。ま。き。の。あ。ら。ひ。歎。き。て。も。又
餘。り。あ。り。花。前。よ。蝶。舞。ふ。紛。々
たる。雪。柳。上。よ。鳥。飛。ぶ。行。々。たる。金
花。の。流。水。に。随。つ。て。音。の。来。る。事
疾。し。鐘。の。寒。く。雲。を。隔。て。聲。の。来。る
事。遅。く。清。水。寺。の。鐘。の。聲。の。孤。園

精舎とあらば。諸行無常の聲。
 やらん。地主。移現の苑の。色。安。能。雙。
 樹の理あり。望者必滅の世の習。
 げにたぬ。ある。粧。佛もえ。捨てし。
 世の。半。は。の。雲。よ。上。入。え。ぬ。能。鳥。の。杖。
 山の。名。と。疎。す。寺。は。桂。の。橋。柱。立ち。
 出で。る。峯。の。雲。花。や。あらぬ。初。接。の。

○仕舞

狎園林下。行。原。南。と。遙。み。眺。れ。べ。
 大。悲。擁。護。の。薄。霞。態。野。接。現。の。
 移。り。ます。馬。名。も。因。り。今。態。野。
 稻。苜。の。山。の。落。紅。紫。の。青。かり。
 紫。の。秋。又。花。の。春。川。清。水。の。た。た。
 頼。め。頼。も。し。ま。ま。も。る。々。の。花。盛。
 山の。名。の。音。羽。あ。ら。の。花。の。雲。

シテ上 伸々ト朗カ

拍子合

五

三

地伸^{チノボ}交^マ深^{フカ}き情^{ナリ}と人^{ヒト}や^ヤ交^マる^ル△^ニわ^ラは^ハ酒^{サケ}酌^{シク}み

舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{地上^{チノウ}に^ニ舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ} 舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ 舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ}

舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ} 舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ}

舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ} 舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ}

舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ} 舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ}

舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ} 舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ}

舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ} 舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ}

舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ} 舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ}

舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ} 舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ}

舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ} 舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ}

舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ} 舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ}

舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ} 舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ}

舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ} 舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ}

舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ} 舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ ^{舞^{マユ}ひ^ヒゆ^ユへ^ヘ}

早^{ハヤ}行^{ユキ} ^{早^{ハヤ}行^{ユキ}}

早^{ハヤ}行^{ユキ} ^{早^{ハヤ}行^{ユキ}}

早^{ハヤ}行^{ユキ} ^{早^{ハヤ}行^{ユキ}}

早^{ハヤ}行^{ユキ} ^{早^{ハヤ}行^{ユキ}}

^{ミテ中}あら嬉しやなま^{カハ}とやあ^{カハ}これ^{カハ}観音^{カハ}
 の法^{カハ}行生^{カハ}あり^{カハ}これ^{カハ}まで^{カハ}なり^{カハ}や^{カハ}嬉^{カハ}
 ー^{カハ}や^{カハ}あ^{カハ}司^{カハ}れ^{カハ}まで^{カハ}あり^{カハ}や^{カハ}嬉^{カハ}ー^{カハ}や^{カハ}あ^{カハ}
^上かく^{カハ}て^{カハ}都^{カハ}よ^{カハ}い^{カハ}供^{カハ}せ^{カハ}ば^{カハ}また^{カハ}も^{カハ}や^{カハ}法^{カハ}意^{カハ}
 の^{カハ}妻^{カハ}久^{カハ}き^{カハ}た^{カハ}が^{カハ}此^{カハ}の^{カハ}ま^{カハ}よ^{カハ}い^{カハ}眼^{カハ}と^{カハ}
^元ゆ^{カハ}つ^{カハ}け^{カハ}の^{カハ}鳥^{カハ}が^{カハ}啼^{カハ}く^{カハ}東^{カハ}路^{カハ}さ^{カハ}り^{カハ}て^{カハ}
 行^{カハ}く^{カハ}道^{カハ}の^{カハ}躰^{カハ}て^{カハ}休^{カハ}ら^{カハ}し^{カハ}逢^{カハ}坂^{カハ}の^{カハ}開^{カハ}

の^{カハ}戸^{カハ}ぎ^{カハ}し^{カハ}も^{カハ}心^{カハ}して^{カハ}明^{カハ}け^{カハ}行^{カハ}く^{カハ}跡^{カハ}の^{カハ}
 山^{カハ}見^{カハ}え^{カハ}て^{カハ}花^{カハ}を^{カハ}と^{カハ}見^{カハ}捨^{カハ}つ^{カハ}る^{カハ}所^{カハ}入^{カハ}金^{カハ}の^{カハ}
 ー^{カハ}れ^{カハ}は^{カハ}却^{カハ}路^{カハ}わ^{カハ}れ^{カハ}か^{カハ}また^{カハ}東^{カハ}に^{カハ}海^{カハ}る^{カハ}
 名^{カハ}跡^{カハ}か^{カハ}東^{カハ}よ^{カハ}歸^{カハ}る^{カハ}名^{カハ}跡^{カハ}か^{カハ}真^{カハ}

MS. A.

MS. B.

遊行柳 概説

内八卷ノ四

時の遊行上人、諸國巡歴の途次岩代國白河の関を越えける時、一人の老人忽然として現れ、上人を導きて先代遊行上人の通り―古道に誘ひ、路傍に立てる一本の古柳を指して朽木の柳といへる名木なりと言ふ。上人其柳の謂れを問へば、昔西行法師が此所にて、「道のべに清水ながる、柳かげ―ば―とてころ立ちどまりつれ」と詠みたる事など語り、上人に十念を授かりたる後いつこともなく消え―が、や、ありて柳の精、老翁となりて現れ、十念を授かりたる為め、身は草木ながら成佛―たりとて報謝の舞を舞ひ、いつか其姿の見えずなりてもとの朽木のみ残りけり。

此曲九番習ノ内ニテ心持工合大分アリ能ク心シテ極フベシ
 小書 青柳舞 朽木留

後シテ	前シテ	ワキツレ	ワキ	役別
柳ノ精	老翁	從者二人	遊行上人	
面皺尉 白傘 柳寂鳥帽子 白鉢巻 着附小格子 單狩衣 色大口 縫紋腰帶 無色扇	面阿古又尉又朝倉尉三 尉鬘 着附小格子 茶銚水衣 嫩子腰帶 尉扇指 珠敷持 又杖突テモ	角帽子 着附無地鬘斗目 縷水衣 白大口 縫紋腰帶 珠敷 扇 又着流僧ニモ	角帽子 着附小格子 水衣 白大口 縫紋腰帶 珠敷 扇 又着流僧ニテモ	束 附
目 番 三	曲柄	月 九	季	所
部 級	等 高 一	暫 古 順	柵 間 古 郡 河 白 西 國 城 警 旗 宿	

遊行柳

小次郎信光作

ワキ僧 用カニ
 次 柳 上 人
 拍子ニ合

諸國遊行の聖みてゆわれ一遍
 上人の教へを受け遊行の利益を
 六十餘町子弘め六十万人決定
 往生の所れと普く衆生に傳へ作

遊行柳

此の程の上総の國あるはしらがこれ
 より奥へし志しん道行上用カニ秋津河の
 國が廻る法の道國が廻る法の道
 迷はぬ月も光そみ心の奥と白
 河の開路と聞けば秋風も甲元たつ
 文霧のらづくはか今宵は宿と
 かり夜日も夕暮ありはけり

日も夕暮ありはけり早行用カニ
 程よ音よ聞きし白行の開きも
 過ぎぬ先ラカよあれよあまた道のふえて
 の廣き方へ行かざむと思ひ候
シテ尉用カニ
呼掛
 ありなう遊行上人の御供の人よ
 中すべき事早カシテの遊カシテの聖と
 れのゴ前シヨをマクあてハカ老ラウ足ソクありとも

今少しきぎびく シテ用カニ 有難や馬れをも
 賜つるべし 気ラカハ まづ先年遊行の御下
 向の時も 確カリ 古道とて昔の街道と御
 通ふゆひあり サレサラソニ されば昔の道と
 教へやさん 運アヒ ぞとて トホ 通へり
 来りたり ワキ確カリ けきやそこの前の遊
 行も ギヤク 此の道あらぬ古道 カニル上 と通へり

事 ニ の 一 あ リ 一 ニ 又 ニ あ リ 昔 シテ用カニ の 一 道
 あり 気ラカハ心持ラフテ 見えたる ヒトムラ 一叢の
 森 サレサラソニ の 一 あ タ の 一 川 カハ 岸 ギシ と シメテ 通 トホ へ トホ あり
 し 確カリ 街道 カイダウ あり カニル中用カニ 其の上 シ 行 ウチ ち キ 木 キ の 一 柳 ヤナギ と
 名 メイ 木 キ あり カニル中用カニ あり シ 貴 キ 士 シ 上 シ 人 ヒト の 一 法 ホウ の
 聲 コエ の 一 草 クサ 木 キ まで モ 成 ナリ 佛 ブツ の 一 縁 ヰ あり シ 結 ムス
 縁 ヰ たり カニル中用カニ あり トホ へ トホ せ シ び ヒ 入 イ り シ 老 オイ たる シ

今それとも見ええわかつず。鳥首のふ
 とひかり。青苔指と埋む者様。
 眞よ星をお年かりたり。さそいつの
 せよりのお本あやらん。ましく語り
 給みべ。昔の人のやし置きりぬ。
 鳥羽の院の水面佐藤兵衛教清
 出家。西行とゆえ。教人此の

回より給ひしが。須の水望月半
 あり。此の川岸の本のもさよ。暫し
 立ち寄り給ひつ。一首と詠り給ひ
 あり。謂と聞け。面白や。さそそ
 西行上人の詠教行れの言の葉
 やらん。六時不歩の御勤めの夢あま
 うちらも。此の集とへ。は。け。る。か。

○小謡

新古今入るよ上赤月 用カニ重シモリ 道の入るよ。清水流るる
 柳陰。清水流るる。柳陰。暫くして
 こそ立ち止り。涼みとる。その葉の葉の
 せままで。も。残る。老木はあつかり。や
 かくて。老人上人の。御十念を賜わり
 御前を立つ。と。見えつる。が。朽ち木の
 柳の古塚。よ。寧ろ。か。か。ん。え。て。失。せ。よ

○半白 用カニ

けり。寧ろ。か。か。ん。え。て。失。せ。に。けり。○中間
 が。き。や。さ。そ。の。朽。ち。木。の。柳。の。わ。れ
 り。詞。と。か。か。け。る。よ。と。念。ひ。の。珠。の
 ね。え。よ。念。ひ。の。珠。の。ね。え。に。は。法。と。か。り
 て。称。名。の。聲。う。ら。そ。あ。る。初。夜。の。鐘
 月。も。曇。ら。ぬ。夜。も。す。が。ら。露。を。か。た
 しく。袂。か。露。を。か。た。しく。袂。か。か

遊行柳

六

後ニ柳精上用カニ確カリ
出端
拍子合ハズ

流水の紋海燕回る。柳條恨と牽
いて新屋よ到る。侍よ朽木の
柳時をとえて。今ぞ佛法よあひ作の
直は道守く。此所の教へ。前生称念。
必得生生の功がよ引かれてまよまよ
でも佛果よある。老木の柳の髪も
礼る白髪の老人。忽然と現れおで

早カル上ニ確カリ
拍子合ハズ

たる鳥帽子も。柳さびたる者様あり
かぎやあさも古塚の草深き朽
木の柳の木のもともより。其の模化し
たる老人の鳥帽子。襟衣とまろしつる
現れ給ふは不審あり。何と不審
し給みらん。ちや神が姿かあらん
まぬの。目も又言の道しるべせし。

到らん事一葉の秋の力あらずや彼の
 黄帝の貨秋が心聞くや秋吹く風の
 音よ散りくる柳の一葉の上よ蜘蛛
 の葉りてささかよの急引き渡る
 空より玉み出だせる舟の道これも
 柳の徳あらずや其の外玄宗華
 清宮うも宮前の揚柳寺おの苑

○仕舞

として眺め絶えせぬ名木たり
 洛陽や清水寺の古立をよ見え
 龍波と事ね登りし氷上よ金色の
 老さす朽ち木の柳忽ちらに揚柳
 観音と現れ今よ絶えせぬ跡とあ
 て。利生あらたある歩と運ぶ空地
 あり。されば都の荒盛大宮人の清

遊ユみもミ蹴鞠キョクのノ庭ニのノ面オモ四ヨ本ホの本ノ影カゲ枝エ
 音ネれてテ言コト又マタ教シあるル昔ムカシのノ音ネ
シテ上柳ヤナギ揚ホウとトてテまマまマせセてテ錦ニとトかカぎギるル諸シヨ人ヒト
 のノ華ハやヤかカあアるルやヤ小コ簾レンのノ際サヘ傳ツりリくるル
 氏ウヂのノ白シロひヒよりヨリ拳ケン劍ケンのノ虎コのノ引ヒキ總ソウもモ
 あアがガきキ思オモひヒにニ楯タテのノ紫ムラサキのノまマのノ拍ヒキ木キのノ
 及ツキびビあアまマ意イ路ロもモよヨうウあアやヤだダれレはハ

老オシいたタるル柳ヤナギ色イロのノ狩カゲ衣イもモ風カゼ折ヲもモ
 風カゼはハ漂ウラみミ足タラシもモとトのノ弱ヨクきキもモやヤ
 老オシ木キのノ柳ヤナギ氣キ力リキあアるルてテよヨわワあアわワとト
 立タちチ舞マみミもモ夢ユメ人ヒトをヲ魂タマとト見ミるルるル
シテ中わワかカあアまマのノ教シへヘ嬉ウレシしシきキ法ホウのノ道ミチ
地上迷マヨいイぬヌ月ツキはハつツれレてテゆユかカんン
シテ上青アヲ柳ヤナギはハ鶯ウ傳ツふフ羽ハネのノ舞マ 柳ヤナギ
 序之舞

○獨吟
○仕舞

花苑ハナノエとろト。たもほえタモホエよけるヨケル。柳ヤナギの
曲マクも致カ舞マシのノ昔コト薩サツのノ舞マシのノ枝エを
返マシすス返マシすスもモ上ウ入イのノ法ホウをセうケ。
喜ヨロコぶブ報ハル謝シヤのノ舞マシもモ。それソレまでマデあり
とト。名ナ法ホウのノ儀ギのノ玉タマもモ貫スげゲふフ。春ハル
のノ柳ヤナギのノ眼メ中ナカとト。袖スベもモつツけケのノ
鳥トリもモ啼ナレきキ。あアれレのノ曲マクもモ柳ヤナギ條ジョウをセ

館タテマツぬヌ。手テ折オリるル。青アヲ柳ヤナギのノ葉ハもモたタをセ
やヤかカよヨ。結ムスぶブ。はハ老オホ木キのノ枝エもモすスくク
あアくク。今イマ年トシがガかりリのノ風カゼやヤ厭ウツをセんとト
漂ウラみミ。是コノ許ヨリもモよヨろロよヨろロよヨわワよヨわワとト
倒タれレ。柳ヤナギかカりリ。ねネのノ床トコのノ草クサのノ枕マクのノ
一ヒト夜ヨのノ契ケもモ他タ生ナマのノ縁ヰあアるル。上ウ入イのノ馬ウマ法ホウ
西ニシ吹フくク。秋アキのノ風カゼうウちチ拂ハラひヒ。露ツキもモ木キのノ

巻行印

二七

此も教り教りて、用ん心 衆も亦の葉も。
 ちりぢりにあり果て、チ 疎る朽木
イウ とありまけり。

藤 戸 概 説

内八卷ノ五

佐々木三郎盛綱、平氏の軍を備前の兒島に攻めて藤戸の先陣せし功に依り、頼朝より兒島を賜り、入部せらる日、賤の女一人さめぐと泣きながら盛綱の前に来り、我が子を海に沈められし怨を申さん為に参りたりと言ふ。盛綱伴りて知らずと言へば、女は其無情を怨みて聲高く争はんことを盛綱押止め、今は隠すまゝとて、藤戸の浅瀬を教へし浦の男を、又もや人に語らんと思ひ、殺害せし當時を委しく語りて聞かせ、追善供養をなしけるに、彼の亡者現れ出で、さめぐに怨を述べ、悪龍となりて祟をなさんごまで思ひに、今計らずも追弔を受けて成佛得脱の身となれりと失せけり。

此曲九番習ノ内ニシテ心持緩急多シ能々心付テ謠フベシ
小書 蹉跎之傳

後シテ	前シテ	ワキツレ	ワキ	役別
漁夫ノ靈	漁夫ノ母	從者二人 (三人ニテモ)	佐々木盛綱	
面瘦男、河津モ、黒頭、着附無地熨斗目、白綾水衣、紋付腰帶、腰巻、扇指、杖突ノ	面深井、髪、無地髪帶、着附無地熨斗目、無色唐織着流	着附無地熨斗目、素袍上下、小刀、扇、内一人太刀持ツ	桐子打烏帽子、白鉢巻、着附厚板、上下長直垂、匕大口、小刀、扇	装束附
目	四番	曲柄	三月	季
部ノ級	高等	替吉順	村戸藤郡島見園前備	所

藤戸

世阿彌元清作

ワキ盛綱 手巻確カリナ
早ツレ三人
次才上
ツヨク
拍子ニ合

去の湊の行く末や去の湊の行く
末や敵の度りあるらん
佐々木の三郎盛綱までいさても
今度藤戸の先陣を仕りしは恩賞
よ。見鳩を賜つていふ今更にもよくい
程よ。只今入部仕りい
道行天ノ
秋津川

彼^ニ萩^ニか^ハあ^ル。鴻^ニ廻^リ。波^ニ萩^ニか^ハあ^ル。
 鴻^ニ廻^リ。松^ニ吹^ク。内^ニも^ニ長^ニ閑^カ。ま^テげ^ハは
 妻^メけ^ルあ^さほ^らけ。船^も道^ある
 浦^傳ひ。萩^戸は^早く^暮き^よけ^り萩
 戸^は早^く暮^きよ^けり。船^かあ^る
 御^前に^ハ皆^と訴^訟あ^らん^ずる^者ハ
 あり^出て^よと^せし^ハ入^畏つ^てハ。

女^中は^皆を^楳に^聞き^ハ此^の浦^の御^主
 依^テ木^殿の^法入^部と^ある^ぞ。行^事
 も^訴訟^あら^ん者^ハ残^り出^て中^しハ
 老^いの^彼却^えて^萩戸^の明^暮に^昔
 の^妻の^か入^れか^りが^きや^あれ
 あり^女の^訴訟^あり^げは^早と^見て
 さ^あさ^めし^依く^は行^事と^あ

るミテカレる用カ運シテ 蟹の如く藤は極む虫のわれ
 からし音をとてそ位かめせとばけよ
 行か恨みん固トヤよりも因果の廻る
 小車グハのやたけの人の罪科トヤの皆
 報トヤいぞといひあがら科が子あがら
 も解りげに科トヤも解も彼の感よ
 沈め給ひ御情トヤあがらすたにつけて

便トヤあけれども御前トヤは事りてあり
 何トヤと科が子を彼トヤは沈め恨みさか

更トヤみ心得ずトヤ科が子と彼トヤ

沈め給ひ事トヤハ音高し

何トヤと何とあうあはも人の知らずと

あうあかなか又其の方様と現して

跡トヤとも帯トヤひ又トヤかせよ生き油りたる

海が多きも訪ひ慰めてたび給わ
 少く恨みも晴るまよ
 こそか信丈夫山母ぶかひあまき世の
 人の扱ひ草も繁きものを行と
 隠し給みらん
 假の宿あると此の母の假の宿あると
 親子こそ作やらん
 幼よ生れ来て

別るれば悲ひの思ひの世々をひく
 とあつて苦みの海は沈め給ひと
 せめては訪はせ給へや
 たまへや
 言語道断かる不便ある
 事こそそのはね
 具の時の者候語つて聞かせ
 べし

去年三月廿五日の夜も入つて浦
の男と二人近づけ。此の海と馬あて
渡すべき所やあると尋ねる。
彼の者やすやうさうさうんが川瀬のやう
ある所の月がらうは東はあり。
月のまは西はありとやす。即ち
八幡大菩薩の御告と思ひ。家の子

若黨も深く傷。彼の者した
二人夜もまきね。吾び出で。此の海の
津又とぬき置きて。海が盛經心
と思ひやう。いかにや下郎の筋あき
者よて。又もや人の語らんと思ひ。
不便のなまら。かゝるも。あつて。うま
寄せ。二刀斬。其のま。海は。沈めて。

歸り〜が心持さしての伴が子にてあつける
先ヲカノ用カニ
 よあハよ〜し行事もあ世の事と
別ニ出シ思ひ今の恨みと晴れ入シテカウテり
 我が子を沈め給ひ〜。在サイ可シヨなり
ワキウヱニ確カリわきうづくの類よて作らカれよ
 見えたる浮洲の岩の少し此方の
 水の深みよ。死骸と深く隠〜あり

シテ中 抑ヘテ用カニ
拍子合ハス司そは人のや〜も少〜も違タひさ
上 先ヲカノ高クナラス様りけりあハのほりりぞとゆみ波の
ワキウヱニ夜ヨルの事あり〜程よ。人は
 知ら〜と思ひ〜又シテ用カニ増カて隠れを
ワキウヱニあハの跡を深く隠す〜思入とも
シテカウテ好事ハを出スでず上カウテ悪事ハふ里と
 行ハけハども子ハをば忘れぬ親あるよト

○獨吟

失クシをレれマみラせシでハるモ行クの
 報ハシいゴ報ハシげニやハのノ親ノ心ノ圖ニ又
 あラぬゴも子を思ふ道は迷ふは今
 こソ思ハひ知らレたレ個ヨりも定メあ
 まサの理の目のあたりト老シ不定
 のさかハあレべ若きをさ手にだてル
 つレあクあル老鶴の眠のうちあれわ

年アあミかリうめはまち離れルも
 侍マちをさし思ハひニ又イつの世ニ
 逢アふべまの母ハ又は女ハ憂キ節ノげ
 手ハ行行の杖柱も頼ミつル蟻の
 此の世をさりぬれべ今の行はか命
 の露をかけてまりありかひも

あらばこそそそもノの憂ウレまイあニも
つと甲七乙ま丙子丁とト同ニ道トあリてタだニせ
給ハ人ノ目メもト知ラずハ伏シまラるハび
我ガ子ノがハ入ルさセ給ハやトあまま
者ノ損ヲと見るコそト表アりケれ。

早ク心ヲ持テ付ケて
あらば不便ヤバク今ノ恨ミてモウシひおまし事ヲあらばあるコトハ奴ノ者ノ跡ヲも

吊ヒひ又妻子も母も立てらる事
あらばあるコトハまづ我ガ家ニあらるハいへん
如ク申ス報カある節ハ奴ノ者ノ不便
よク損ノよクままごまの吊ひとあらるハ又
今ノ母も母も立てらるコトハいへん
あらばあるコトハ其ノ由ヲしらべテ申ス
横ノよク吊ヒひ法ノ聲たてるハ吊ヒひ

上等三人
待議
ツヨク

中人狂言シガク

法ホウの聲コエたてて。彼カも浮ウキ寝ネの夜ヨと
なく。晝ヒルともわかれぬ吊ツルひの般ハン若ニヤクの
船フネの枳キのづから其ソノの總ソウとそく法ホウの
心ココロと懇コンめ聲コエとよげヨウ
害ガイ三界サンカイ不フ墜タイ去キョ惡アク報ホウ
一切有情救

後ノチシテ男オトコ上ウラ田タカカ浮ウキカカ様サマ
一ヒト声コエヨヨクク直ナ愛アイしや思オモひ出デで。忘ワスレれんと思オモひ
心ココロこそ。忘ワスレれぬより。思オモひあれたる

あても身ミはあだ彼カの定サダメめあ
とも科カよよるべの氷ヒヤよこそ。傷キズ
心ココロの罪ツミあらば重オモシき罪ツミ科カもあるべ
まにマニよし。あかりける。海ウミ路ヂのしるべ
思オモへば三サン途トの瀬セ踏フミあり。かまわあ
ちや明アキラけ方の氷ヒヤ上ウラより。化カしたる人の
見ミえたる。彼カの亡シノ者モノもやんぬらん。

114

奇^カ異^イの思^{オモ}ひを^シお^シけ^レれ^バ御^{ミコト}吊^シひ^の有^ラ
 難^ナけ^レれ^ドも恨^{ウラ}みの盡^ツきぬ^キ事^{コト}執^シと^ヤさ^ん
 た^メみ^まり^{たり}たり^何と恨^{ウラ}みと^ゆ月^{ツキ}の^事
 具^ツの夜^ヨは^ゆ浦^{ウラ}波^{ナミ}の^事教^シ戸^トの^後り^教
 へ^すこの^位も^重き^岩波^ノの^川瀬^ノの^やう
 ある^津みの^通り^を教^ヘま^はに^渡り
 一^かば^引矢^ノの^御名^ヲを^揚ぐる^のみ^か

○獨吟
○仕舞

昔^{コト}より^今も^さる^まで^馬あ^て海^ヲと
 渡^ス事^ヲ稀^イ代^ノ例^ヲあ^れば^とて
 此^ノ鳩^トは^恩は^賜は^る程^ノ御^悦び^も
 わ^れゆ^ゑあ^れば^いか^らあ^る恩^ヲも
 月^{ツキ}あ^らま^に思^ヒひ^のあ^らま^をと^らさ^れ
 事^ノ馬^ヲあ^て海^ヲと^渡す^より^もら^れ
 ぞ^稀代^ノ例^シあ^るま^でも^忘れ

下^ノた^ヤあ^レあ^ルあ^ル浮^洲の^岩の上^ニは
 わ^レを^ツつ^レて^行く^あの^氷の^如あ^ル
 刀^ヲと^抜り^て胸^ノあ^たり^を刺^シ通^シ
 刺^シ通^スる^れハ^肝魂^も消^え消^え
 と^ある^所を^具の^ま海^ニ押^し入^れ
 ら^れて^千尋^ノ底^ニ沈^みし^ま
 退^くゆ^み物^等退^くゆ^み
 シテ^中退^くゆ^み

引^かれ^て行^く波^ノ浮^きぬ^洗み^ぬ埋^め
 れ^来の^岩の^狭間^ニ流^れか^つて
 最^上の^水底^ノ悪^龍の^水神^とあ^つ
 て^恨み^をあ^らし^め思^ひし^る思^ひし^る
 御^吊ひ^の舟^法の^舟船^ノの^りを^えて
 即^ち松^葉の^舟又^浮入^ハ水^割れ^掉
 さ^り引^きて^行く^程は^死の^海と

扉

渡りて、^ニ 然^ニ 此^ニ の^ニ ま^ニ に^ニ や^ニ ま^ニ や^ニ す^ニ と^ニ 彼^ニ の^ニ
者^ニ 子^ニ 到^ニ り^ニ 到^ニ り^ニ て^ニ 彼^ニ の^ニ 岸^ニ 子^ニ 到^ニ り^ニ 到^ニ り^ニ
て^ニ 成^ニ 佛^ニ 得^ニ 脱^ニ の^ニ 身^ニ と^ニ な^ニ り^ニ ぬ^ニ 成^ニ 佛^ニ
の^ニ 身^ニ と^ニ ず^ニ あり^ニ 又^ニ け^ニ る^ニ。

大正九年八月廿五日印刷
同 年八月三十日發行

著者 權作 所
題 不 許

訂正著作者 廿四世 觀世元 滋

發行所 兼 檜 常之助

發行所 檜 大瓜

印刷所 江川 堂

東京市四谷區傳馬町貳丁目



終